

利根川沿いの土手を歩いていると、海風に乗って潮の香りが漂ってくる。

小学校に上がってから六年、中学校に上がってから一年と三ヶ月、湊千早は毎日のように土手沿いの道を通ってきた。千早の暮らしている村にはまともにも使える自動車なんてないから、広い道幅を気にせずのんびりと歩いていられる。むしろ真剣に気にするべきは、ひび割れたアスファルトにつまずかないからだ。

土手のてっぺんから眺める海は、世界の広さを肌で感じられる。上昇する海面を食い止めている土手は「人類の生息圏はここまでだ!」と主張していた。土手沿いの道を通るたび、世界の果てはここにあるのだと千早は思い知らされる。

無限に広がる海原の所々からは、海中に没した建物の頭やら、高く掲げられた看板やらが突き出ている。海水にまみれて腐食したモニュメントは、そこがかつて人類の住処であったことを静かに物語っていた。

百年前までは利根川以南の地域にも人間が住んでいたらしい。小学生のとき、両親から教わって衝撃を受けたことを千早は覚えている。それからしばらくの間、昔の人たちは海の中で暮らしていたのだと勘違いしていた、親戚一同に大笑いされてしまった。

そういった恥ずかしい思い出も、穏やかな波の音に吸い込まれて消える。

穏やかな海風がセーラー服のプリーツスカートをはためかせた。

サイズの一回り大きなセーラー服にも、一年と三ヶ月も着ていれば流石に慣れる。

新品の服なんて滅多に手に入らないご時世である。千早の着ているセーラー服は、従姉からもらったお下がりだ。その従姉も他の親戚からもらってきたわけで、もしかしたら自分の母親が着ていた可能性すらある。

私も中学校を卒業したら、親戚の子に制服をあげるんだろなあ……なんてことは千早もたまに考える。でも、卒業まで残り一年半もあるのだ。未来について真剣に考えようとしても、なかなか本気になれず、そのうちに頭が回らなくなってしまう。

「まあ、そんな先のことを気にしても仕方ないか……」

大海原を前にして一人きりでいると、思わず暢気な独り言も漏れ出る。

文明を呑み込んだ大海が「細かいことなんて気にするなよ!」と語りかけてくるような気がした。頭上を旋回している海鳥たちも、明日は明日の風が吹くとばかりに飄々としている。本当に気楽なもんだな、動物つてやつは……。

そんなことを考えていると、背後から一台の自転車が千早に迫ってきた。

千早の暮らしている村には、まともにも動く自動車は一台も残っていない。自転車だって片手で数えられるくらいしか残っていないから、土手沿いの道を通る自転車というだけで、誰が乗っているのか簡単に分かる。

潮風に混じって林檎の爽やかな香りが漂ってきた。

千早を自転車で追い抜いたのは、彼女のクラスメイトである烏丸凜子だった。

腰まで伸ばされた黒髪が、強くなった潮風で大きくはためいている。

自転車、うらやましいなあ……。

追い抜かれる瞬間、千早と凜子の目が合った。

凜子の視線は冷え切っており、近づきたい雰囲気が一瞬で伝わってくる。同じ村の子供なので、幼い頃から名前くらいは知っていたが、毎日顔を合わせるようになったのは中学生になってからだ。一学年につき一つしかないクラスで一緒なのだが、それこそ最低限の事務的な会話しか交わしたことがない。

お互いに助け合うのが当たり前な昨今、クラスメイトから距離を置こうとする姿勢は珍しい……というか、生き方に無理があるようにしか見えない。人類は身を寄せ合って生きていくしかないのだから、意地を張って孤独を演じるだけ損ではないだろうか。千早が心配しているうちに凜子の背中は見えなくなった。

千早が歴史の授業で習ったことによると、今からちょうど百年前の二〇一六年に『恐怖の大王』を名乗る人物が、世界規模のテロを行って人類全体に大打撃を与えたいらしい。

賢くなりすぎた人類のせい、地球は汚染されて減ぼうとしている。だから、賢くなった人類をなるべく減らして、みんなで美しい新世界を手に入れようじゃないか……恐怖の大王はそんなことを高らかに主張していたのだとか。

世界規模のテロが起こった結果、地球の人口は百分の一以下に減少、さらに電子機器の九割以上を破壊された。電気もほとんど使えないし、機械を修理製造できる技術者もないし、医者が足らないから病氣や怪我が致命的だし、子供たちに十分な教育を受けさせられる環境もないし……とにかく散々な状況なのである。

恐怖の大王が望んだ通りに地球の汚染はストップした。けれども、人類は減らされただけに留まらず、もはや滅亡まで秒読み段階に突入している。生き残った人類は恐怖の大王の言葉を借りて、世界規模テロのあとの

時代を『新世界』と皮肉たつぷりに呼んでいる有様だ。

まあ、新世界に突入してから百年も経過しているわけで、テロ以前のことを持ち出して、今は不便だとか何とか騒ぐ人もいない。そんなことをしても無意味だからだ。冷めているわけではない。本当に冷めている人間は、数少ない人類の中ですら、人間関係を切り捨てるのだと千早は思っている。

たとえば、そう、あの烏丸凜子のように……。

千早が帰宅すると、太陽は沈む寸前で、自宅を囲む畑はオレンジ色に染まっていた。今の時代、自給自足が基本である。

他に仕事をしている場合でも、自分で食べる野菜くらい育てるのが普通だ。キュウリを育てているネットの陰から、麦わら帽子を被っている母が顔を出す。

千早に負けず劣らず小柄で、なおかつ童顔な母は、さながら夏休みの宿題で野菜の観察をしている子供のようだ。実際のところ、今年で三十歳という若さである。でも、これくらいの若い母親は珍しくない。新世界ではテロ以前に比べて、人間の寿命が大きく縮んでいる。結婚年齢や出産年齢が下がるのも必然だ。

そんなわけで、中学卒業と同時に結婚する少女もかなり多い。百年前の人が知ったら「江戸時代じゃないんだから！」と言ったに違いない。あるいは「子供の虐待！」だろうか？ でも、中学校以上の教育を受けられる場なんてないし、人手不足だから働かないといけないし、そもそもにして子供を産んで次の世代に繋がなくちゃいけないし……。

自分も中学を卒業したら、誰かと結婚するんだろうな。